

## 反転する漢語

—複合動詞を中心として—

猿 田 知 之

### はじめに

新聞・雑誌などで見慣れている漢語に、改めて心遣いがあることがある。例えば、明治期の著作を通覧すると、現今の漢字列と異なる例に遭遇する。明治の青年を描いた小説、森鷗外『舞姫』（1890年）『青年』（1910年）と夏目漱石『坊っちゃん』（1906年）『三四郎』（1908年）には次のような漢語が見える。

耐忍してこれを実行する（舞姫）

古に復るが即ち醒覚である（青年）

おれは単簡に当分うちは持たない（坊っちゃん）

陥欠のない社会（三四郎）

現今では反転した字順、すなはち「忍耐」「覚醒」「簡単」「欠陥」が普通に用いられている。これはどうしたことなのだろうか。

人は、ともすれば、己の身を置く地域、或いは自身の生きている時代を中心にものを考えがちである。従って、上記の漢語に出会うと、まず誤記・誤植と考えてしまう。極端に走れば、文豪たちの誤謬と判断することもあるだろう。しかし、このような反転は、漢語の史的变化であり、和語のそれとなんら変わるところがないのである。ただ漢語の変転が、あまり知られていないにすぎない。

漢語のこのような反転をみる時、まず問うのは、何時頃から現在の字順となったのか、という時期の問題であろう。加えるに、何故反転したのか、その言語内的・外的因由を考察することであろう。更に探求心が加われば、『三四郎』にみえるように、「単簡」「簡単」（「甚だ簡単なものに過ぎない」）が併用されている時、どのような差違があるのか、すなわち、意味分化について考えをめぐらすに及ぶ。

このような問題を考察する前に、まず如上の現象を、反転現象と呼び、さらに該当する漢語語群を反転語群、当該漢語を反転語と呼び、以下用いることにする。

筆者は、漢語反転現象について既に二論文を書いているが<sup>1)</sup>、なにぶん当該問題について試行錯誤の試みゆえ、十分に明らかにしえず、進捗しないでいる。この度は、複合動詞に焦点をあて、再々度、上記の問題に及んでいきたい。漢語複合動詞の数は、『大漢和辞典』『漢語大詞典』を一見すればわかるように、その数膨大である。本稿では、列島言語語彙として、その数の少ないラ行音を含む漢語に限定し、更に奈良期から鎌倉期までの文献を中心に考察をすすめたい。

## 一 漢語の構成について

二字漢語の構成に関する記述は、中国で出版された関係書をみる限り、名称にいささか相違があるものの、ほぼ同じである。例えば、劉月華らの『實用現代漢語語法』<sup>2)</sup> (ただし本稿では片山博美ら共訳『現代中国語文法総覧』〈1997年、くろしお出版〉による。)では、

- 一 等位式 (幫助・學習・始終など)
- 二 偏正式 (移植・遊撃・鳥瞰など)
- 三 動句式 (命令・動員・出席など)
- 四 補充式 (埋没・圧縮・説明など)
- 五 主述式 (地震・霜降・性急など)

の五方式である。この漢語構成法にも史的推移・傾向のあることが最近指摘されるようになった。徐朝華氏の『上古漢語語匯史』(商務印書館, 2003年)によれば、最も早く出現したのは殷代甲骨卜辞にみえる「偏正式」であり、この方式は時代が降るに従って頻度がくだる、と言う。また、西周から春秋戦国時代に至るに及んで、「補充式」を除いた方式が出そろった、とのことである(315頁)。

漢語構成法の内、複合動詞考察に係わるのは「等位式」「偏正式」「補充式」ということになる。このような呼称を、いささか乱暴であるが、所謂「主要部」(HEAD)と「非主要部」(NON-HEAD)の観点から表記を改めれば、それぞれHH式、NH式、HN式と簡潔に表示できるのではなかろうか。このような表記のほうが相互関係が把握しやすく思われる<sup>3)</sup>。以下、この表記によることにする。

## 二 列島漢字受容の問題点

漢土で創られた漢語の受容に問題が果たして存在するのか。漢語は大陸使用のものがそのまま、なんの抵抗も摩擦もなく、受け入れられた、と考えるのが一般的である。従って、受容になんの疑義も存在しない、とするのが大方の見解であろう。しかし虚心に考えれば、列島言語と中国語には言語的性格を異にしているのであるから、その受容において、なんらかの制約・制限が生ずると考えるのが自然である。上記のHH式・NH式の漢語であれば、列島言語の語合成法にも存することから、なんら問題なく受容されるはずである。ところがHN式の漢語となると、列島言語の性格に反することになる。このような場合、時にはさまざまな摩擦・抵抗が生ずるのではなかろうか。統語的制約が働き、列島言語の語合成法に従って、漢土とは異なる字順、すなわち反転という現象が発生するのではなかろうか。また、制約が機能せず、反転現象が生ぜず、そのまま受け入れたときには、それはそれで相応の言語的理由が存するはずである。このように考えていくと、一見問題もなさそうな漢語受容には、列島言語に比すべき変遷の歴史があると想定できるのである。今、具体例をあげてみよう。われわれは何気なく「疲労」「勤勞」などを使うが、改めてその意味を確認するために辞典をひくと、「肉体または精神をひどく使った(＝勞)ため、つかれること。」(岩波国語辞典第六版)、「心身を勞して勤めにはげむこと。(広辞苑第四版)とある。これらの解釈に従えば、共に「HN式」の漢語で、列島言語の性格と乖離す

る語ということになる<sup>4)</sup>。どうも列島言語の語合成法に馴染まない。合成法からすれば、むしろ「労疲」「労勤」のほうが望ましいはずである。しかしなが「労疲」「労勤」を耳にしない。なぜなのか。

そこで筆者は、日本中世までの主要文献にあたって、受容とその変容を辿ってみようとするのである。

### 三 漢語の反転現象

嘗て、中国古典語について、「一語一音にして一字の、またそれによって随意に成語を文字の配列をつくり易いシナ語及び漢字の特殊な性質」<sup>5)</sup>が指摘されてきた。このような認識は、既に隋代にみいだせるようである。劉炫の『毛詩述義』旧文に「中谷、谷中、倒其言者、古人之語皆然、詩文多此類也」<sup>6)</sup>とあるところからすると、このような反転現象の事実には訓詁学者は気づいていたようだ。『尚書述義』でも「古人之語多倒」<sup>7)</sup>と記している。「古人之語」と特記しているところから、逆に隋代には反転語が比較的少ないという口吻が看取される。

漢土における反転現象・反転語は時代が降るに従って、たしかに諸家指摘するように減少する傾向にある。しかし、ただ反転させるだけで語彙を増やせるという簡便な方法は容易に破棄できなかったようだ。例えば、唐宋八家の劉宗元(773~819)・韓愈(768~824)の著作を一瞥しただけでも、次のような反転語が採取できるのである。

威嚴・嚴威	牛馬・馬牛	勤勞・勞勤	訊問・問訊	朋友・友朋
平生・生平	平和・和平	復習・習復		(『柳河東集』)
言語・語言	往還・還往	議論・論議	朋友・友朋	往来・来往
戦闘・闘戦	嗟歎・歎嗟			(『韓昌黎文集』)

従って、言語史学でよく示される下記図のような一方向性(unidirectinality)も、漢語の場合はだいぶ緩やかに理解すべきであろう。

$$A > \begin{matrix} B \\ A \end{matrix} > B \text{ 8)}$$

受容する日本列島では、漢土の言語状況がどのように反映のであろうか。特に列島言語の言語的制約はどの程度機能したのであろうか。

### 四 列島漢語史における受容と反転概況

まずラ行音を含む漢語を採撫して、各字の字義を調べることで、相互の構成関係を知る必要がある。このような時、阮元(1764~1849)の『經籍纂詁』はありがたい工具書となる。

HH式として、「乱」「勞」「老」を含む次の漢語がとりだせる。

雜乱・乱雜	惑乱・乱惑	逆乱・乱逆	暴乱・乱暴
劬勞・勞劬	勤勞・勞勤	衰老・老衰	朽老・老朽

これらの反転語は前記工具書によれば同義とされる。例示してみよう。

乱	○——雜也[荀子解蔽] 故学乱術足以先王者也注。
雜	——乱也[易雜卦伝] 釈文引孟注

これらは、相互に類義の関係にあることから、いずれを前部要素とするかは任意となる。しかし、実際に文献を閲すると、両形が併用されているものと、一方のみに使用が偏向しているものがある。

まず、雑乱・乱雑について言えば、中国文献には「乱雑」用例が少ないようで、『漢語大詞典』では、梁の簡文帝の「賦」と近人郭沫若の作品を挙げている。それに比して、「雑乱」は用例に事欠かない。このようなことから、「乱雑」を日本製漢語とみるむきもある<sup>9)</sup>。しかし、用例は少ないものの、『文章軌範』に収められている柳宗元・韓愈の文章に例がみられ、降って南宋の『夷堅志』乙志巻一にも目撃しえる。さらに韓土文献『太宗実録』巻一四、七年七月戊寅(1407年)条に「乱雑言説、将来可慮」とある<sup>10)</sup>。列島文献にあっても漢土の傾向と呼応するかのように用例がすくない。稀用例として、『凌雲集』にみる嵯峨天皇例がある。中世に至ってもその傾向は変わることなく、わずかに『鎌倉遺文』(補遺第一巻、補一八〇)に一例拾えるのみである。

然間先年不慮之外、本寺乱雑之刻(建久七年<1196>四月十三日)

惑乱・乱惑はすでに漢代までに両形が現れ、併用されている。筆者が調査した宋代禅籍では「乱惑」は見あたらず、「惑乱」(景德伝燈録・碧巖録・五燈会元)のみがみいだせる。『日本国語大辞典』(第二版)では、「惑乱」例として『正法眼蔵』、「乱惑」例は近代文献をあげている。列島文献に姿を現すのは中世あたりからのようだ。

逆乱・乱逆は漢土には偏りがあったようで、『大漢和辞典』を閲すると、「逆乱」例として漢代までの文献があげられている一方、「乱逆」は出項されてはいるものの、その用例は、何故か「逆乱」である。『漢語大詞典』は博搜したらしく、秦峰山碑・三国蜀諸葛亮・周書から「乱逆」例を掲げた。『日本国語大辞典』では共に鎌倉以降の文献例をあげる。管見によれば、両形ともに平安古記録『春記』にみえる。「乱逆」は『水左記』『帥記』『中右記』にも現れる。「乱逆」が優勢の印象がある。ところが、鎌倉期に至ると、「逆乱」は「乱逆」と拮抗してくる。『玉葉』『愚管抄』『吾妻鏡』『百練抄』には両形が採取できるのである。『鎌倉遺文』所収の古文書にも二つの形が目撃される。

暴乱・乱暴には偏向が漢土に在る。すなわち、前記の漢語辞典において一三世紀頃までの文献を「乱暴」に掲げていないのである。「暴乱」なら書経・荀子など先秦文献例が挙げられている。筆者が調べ得たところでは、列島文献における「暴乱」は『吉記』(1166~1192)あたりから見いだせる<sup>11)</sup>。「乱暴」も『古事談』に「忠実、武正ノ乱暴ノ訴訟ヲ黙過スル事」(第五)の一例を見る。もし翻刻に誤りがなく、誤植でなければ、初出ということになるうか。いずれにしても、この反転語は平安末期から鎌倉期にかけて姿をみせたということであろう。ちなみに、音形・語義が同じの「乱(濫)妨」がある。『平安遺文』や『鎌倉遺文』では、「乱暴」より「乱妨」が頻用される。ただし漢土には見あたらないらしく、『漢語大詞典』には出項されていない。あきらめずに文献を渉獵すると、一〇〇四年に成る『景德伝燈録』(大正新脩大蔵經第五一卷所収、431頁下段)に、「何驚動妨乱吾邪」に出会う。とすれば、「乱妨」は「妨乱」の反転語ではなかろうか。目下のところこれ以上のことは言えない。

劬勞・勞劬は、『元稹集』(中国古典文学叢書、中華書局)などを閲すると、併用されている。韓土文献では『三国史記』(1145年成る)、『東国李相国集』(李奎報<1168~1241>)

に「劬勞」が、時代降って『東文選』（1478年成る。新羅～朝鮮朝作家約五〇〇名の詩文四三〇二篇を収録）には両形が採取できる。列島文献では、聖武天皇宸翰『雜集』に「劬勞」がすでにみえ、平安初期の天台宗僧円仁（794～864）の『入唐求法巡礼行記』でも用いられている。「勞劬」は遅れるようだ。鎌倉期禅僧の著作を討尋すると、虎関師鍊（1278～1346）の『元亨釈書』に見える。同音同義語として「勞苦・苦勞」がある。「勞苦」は『田氏家集』（891年）や『醍醐天皇宸記』に姿を現す。「苦勞」もほぼ同時期に登場する。『類聚国史』卷八十に「国家騒然、万姓苦勞」とある。『日本国語大辞典』（第二版）の「語誌」では、「「勞苦」は、「苦勞」よりも古く平安前期の「田氏家集 上」に既に見られるが、中世では、「苦勞の方が一般的であった。」と記している。ところが、筆者が調査したところでは、「苦勞」が「一般的」とは思えないのである。例えば、『鎌倉遺文』を調べてみると、「勞苦」例は極めて少なく、「劬勞」が多数をしめる状況である。因みに、唐代の仏教百科的類書『法苑珠林』（668年成る）では一例のみ採取できるのみである。五代・宋の禅籍を閲すると、「劬勞」例がほとんどとなる。

同じく「勞」のつく漢語に「勤勞・労働」がある。現今では「勤勞」が一般的であるが、両形とも漢・韓土の文献にみえる。一二八〇年代に高麗僧一然が編纂した『三国遺事』にも併用されている。列島文献では、両形が『続日本紀』に現れる。ただその後、「労働」例は稀れとなる。わずかに平安期古記録『小右記』『長秋記』で採録できるだけである。

更に、「疲勞・勞疲」もある。ただ漢土にあっては偏りが存するようで、「勞疲」例として諸辞典は漢の焦贛の『易林』を掲げるのみである。稀用語ということであろう。筆者は『法苑珠林』で「十周方成、三業勞疲」（卷一百）を得た。列島では『続日本紀』に「疲勞」例を採取できる。「勞疲」は『三卷本色葉字類抄』にみるのみである。「トコツミ 久病身付抜也」とあって、病身をいうようである。『大言海』（1937年）には「病床ニ就キテ居ル身体。病床ニネテ居ル身」とある。意味の転用がすでに生じている。その後「勞疲」を目撃しえないところからすると、列島でも稀用語であろう。

衰老・老衰も漢土で併用されている。ただ漢訳仏典『法華經』や『敦煌變文』では、何故か「衰老」に使用が傾くようだ。韓土の『東文選』は、漢土と同じく併用している。列島では奈良期に両形の使用が認められている。平安期の『小右記』『本朝無題詩』などでも両形が見いだせる。ただ「衰老」が、『山槐記』『玉葉』『吉記』『明月記』『吾妻鏡』などの古記録で頻用されていること、或いは「老衰」の訓読語「おい衰へ」（竹取物語・平家物語）「老テ衰」（今昔物語）が見いだせるところから、語性の分離が読みとれそうである。

朽老・老朽は、なぜか『日本国語大辞典』に出項されていない。「老朽化」が登載されているが、出典がない。両語とも漢土でも多用されていないのか、『大漢和辞典』と『漢語大詞典』は、ともに「老朽」例として唐の鄭愚の「大円禅师碑銘」をあげる。「朽老」は『後漢書』や『南史』を引く。宋代禅籍『景德伝燈録』『五燈会元』にも「老朽」をひろうことができる。列島文献では、用例を誇る前記辞書からも解るように、用例の検出は容易ではないことが予想される。筆者の目撃しえたのは「老朽」ではなく、「朽老」である。道元（1200～1253）の『正法眼蔵』行持上に「愚夫朽老」「朽老は阿誰よりも朽老ならん」とある<sup>12)</sup>。すくなくとも禅籍中での道元が用いた「朽老」は列島文献ではきわめて

珍しいといえる。

以上は類義の反転語となる漢字をまとめて扱った。他に次のような反転語が採掲できる。なお移動を現す「往来・来往」「去来・来去」「到来・来到」「入来・来入」などは、別個にとりあげたほうがよさそうなので<sup>13)</sup>、今回は擱くことにする。

思慮・慮思    治療・療治    離別・別離    掠奪・奪掠  
旅行・行旅    流浪・浪流    露顕・顕露

まず、思慮・慮思に関して、慮思が耳遠い語であることは確かである。或いは、その存在すら思いだにしないかもしれない。漢土でも紹介されている用例は、『文選』所収の曹植(192~232) 詩の一節「苦辛何慮思」にすぎない。従って、列島文献にみることはあるまいと思われるが、意外にも鎌倉期の漢語語彙集『文鳳抄』(巻六、音楽部、琴茶)「嵇康琴賦、顧茲桐興慮思考(嵇康が琴賦に、茲桐を顧みて、慮思を興す)」(本間洋一校注、『歌論歌学集成別巻二』所収、196頁、2001年、三弥井書店)とある。ただ校注者によれば、この箇所の「慮思」は「断章抄出」であるという。編者によって造出されたことになる。「慮思」なる字列が列島でも予想される例として、更に遡上して奈良期の『万葉集』巻十八にみる「勝宝元年十二月十五日」の書簡末尾に「陶然遣日何慮何思」とある。これが漢文修辭法の一つ「割裂」<sup>14)</sup> とすれば、「慮思」も列島にはやくも受容されていたことになる。しかしこれは間接証明にすぎない。筆者の目撃しえたのは源信(942~1017)の『法華弁体』(『恵心僧都全集』巻三、267頁)にある「慮思此義、如会昔友」が唯一例である。反転形が存するものの、「思慮」が終始独走した例である。

療治・治療は、その点では、列島での交替は実に截然としている。まず漢土文献では併用されていたようである。ただ使用状況に注目すべき傾向が宋代にみてとれる。すなわち、張季明の『医説』(1189年)では「療治」0例に対し、「治療」20例という偏りがある。同様に、『夷堅志』(1200年頃)では「療治」3例に対し、「治療」10例という数値をみる。列島では九世紀文献に両形がみられる。ただその使用頻度となると、両形が対等というわけではない。「治療」は『日本霊異記』に初出するが、それ以降の文献に、つまり鎌倉期までの文献に殆ど見いだせない。『鎌倉遺文』は「療治」<sup>15)</sup> のみで占められている。漢土の使用傾向が療治→治療へと推移するとみれば、列島も大陸に即応するかたちでだいぶ遅れながらも「治療」へと移っていったようである。『新明解国語辞典』第五版では、「療治」は「「治療」の意の老人語」としているが、「治療」が優勢となるのは鎌倉以降のことになる。

反転する漢語は、現今の中国にも相当数存在するため、その用い方について解説した辞典が近年刊行された。楊英耀著『同素異序応用詞典』(2003年、珠海出版社)である。一二〇〇余りの反転語を収録している。小稿で採りあげるいくつかも採録されている。たとえば、「離別・別離」は「同属動詞、詞義相同、可互換使用。」とある。『楚辞』で既に併用されているところからすると、一方に偏ることもなく今日に至ったようにみえる。ただ漢訳仏典では「別離」が「新興」とする学者もいる<sup>16)</sup>。寓目した仏典で康僧鎧訳『大無量寿経』に「別離久長」「皆当別離」(巻下)、羅什訳『法華経』では「與子離別」とあるところからすると、精査する必要があるであろう。韓土では『李東国集』に、降って『東文選』でも併用例がみられる。列島でも奈良期から両用されている。『鎌倉遺文』では、「別

離」は「離別」に及ばないが、拮抗しているとみてよからう。『吾妻鏡』も同様な結果をしめしているが、和文系の『延慶本平家物語』では「別離」のみが用いられている。

掠奪・奪掠では、「奪掠」の漢土文献例が目下のところ確認されていない。ただ韓土の『三国史記』卷三（1145年）や金石資料（崔士威廟志，1075年）<sup>17)</sup>に「奪掠」が確認できる。このことからすると、宋代中国文献あたりに見いだせるかもしれない。列島では、『続日本紀』卷二十五の「起兵作逆，掠奪鈴印」をはじめとして、『日本三代実録』卷十二、『法曹類林』卷二百廿六、『類聚国史』卷八十四などに「掠奪」がみえる。「奪掠」となるとだいたい後発のようで、『政事要略』卷五十一の太政官符（天慶九年十二月七日）に「陵辱妻子，奪掠牛馬」、『将門記』の「為良兼被殺損奪掠人物之由」が初期例といえようか。ただ「奪掠」がその後、文献に目睹するのは稀れである。

行旅・旅行について、『同素異序詞応用詞典』では「詞義」「詞性」が、すなわち字義も品詞も異なるから、「互換使用」はできないとしている。現代語においてはそうなのかもしれないが、古典語にあっては「互換」可能というべきである。『経籍纂詁』には「旅行也」として「儀礼燕礼記」などの訓詁例をあげている。漢土文献で「遠行」の意味をもちはじめるのは『礼記』あたりかららしい。韓土の『李東国集』では併用されている。列島では、どうやら「行旅」のほうが先のである。『万葉集』卷三に「筑紫娘贈行旅歌一首」、さらに『続日本紀』卷五に「令行旅人必齐錢為資」（和銅五年十月乙丑）とみえる。「旅行」は大江匡衡の『江吏部集』、『江談抄』、『本朝無題詩』に見るものの、「行旅」に代わる程ではない。『千載佳句』『和漢朗詠集』の部門名として「行旅」が用いられているからである。鎌倉期文献にあたると、『鎌倉遺文』では、文書の性格からして用いられにくい語のようで、わずかに「旅行」一例採取できたに過ぎない。『明月記』や『吾妻鏡』に「旅行」が、用例は少ないながらみえる。文献を通してみる限り、「旅行」が優位になるのは、南北朝以後といえようか。

流浪・浪流は極めて限定され、漢・韓土には「浪流」例をえることなく、列島でも、平安末期の『今昔物語集』に限っての反転語といえようか。漢土の「流浪」は、『漢語大詞典』の出典からすると、四世紀後半の晋代あたりから姿をみせるらしい。列島文献では、八世紀末になる『続日本紀』に「詎勸流浪之徒」（卷廿三）が初出のようだ。時代降って鎌倉期でも、まず『鎌倉遺文』に収められている古文書の殆どは「流浪」である。禅僧語録『念大休禅師語録』『仏光国師語録』や道元『正法眼蔵』（海印三昧）、無住『雑談集』も「流浪」である。興福寺の実叡の『建久御巡礼記』なども等しく「流浪」である。ひとり『今昔物語集』のみに、反転形が現れる。同書では「流浪」13例に対し「浪流」1例である。当該箇所を示せば次のようである。

鳳至ノ孫，此ク浪流シ行ケル程ニ，年モ老ケレバ（卷二十六～十二）

この「浪流」は、所謂「孤例」というべきか。

顕露・露顕についても、漢土では「露顕」は容易に検出できるが、「顕露」となると見いだすことが困難のようだ。列島文献では、『往生要集』（985年）の「利益甚深，不能顕露」（卷上）を初めとして、『平安遺文』所収の「東大寺所司請文案」（一三六七号，1096年）にも「寺家之陳状之趣顕露歟」と使用されている。一方の「露顕」はすこし遅れて、平安末期の『日本紀略』天曆元年七月廿二日条「近保所犯之露顕也」などに現れる。鎌倉

期にはいると、両語の勢力関係が顕在化する。『鎌倉遺文』所収の古文書では、延べ語数において「露顕」は「顕露」を圧倒する。『明月記』においても同様である。ただ、『吾妻鏡』では「顕露」より「露顕」の頻出度はたかいが、圧倒的という差ではなく、拮抗しているとみてとれる。目睹した限りでは中世あたりから「露顕」に席卷されていく様相を呈している。なお和語「ところあらはし」（結婚披露）に「露顕」を宛てる例が、『江家次第』『色葉字類抄』などにみえる。

以上の反転語は相互類義関係を持つ典型的な HH 式である。同じ HH 式でも類義関係とは言えないが、近縁意味関係の反転漢語群がある。以下の漢語がそれに該当しよう。

葬斂・斂葬    動乱・乱動    礼拝・拝礼    領掌・掌領    離乱・乱離  
論談・談論

葬斂・斂葬における「斂」は、「古籍のなかでは「斂」を「歛」と書き誤ることがある」（戸川芳郎監修『全訳漢辞海』）。ここでは書き誤りも合採する。漢土では『漢書』をはじめとする史書に「斂葬」がみられるが、その反転形「葬斂」を『大漢和辞典』や『漢語大詞典』にみいだすことができない。従って「葬斂」は列島創製漢語かと考えたくなる。ところがそこが言語史学の「宿命」か、近年刊行された、六世紀末に成る『孝子伝』（幼学の会編『孝子伝注解』、2003 年、汲古書院）に当該語を見いだせたのである。漢土にも存在したことがわかる。列島文献では、『類聚国史』の「壓没之徒速為斂葬」（巻百七十一）や『三代実録』（901 年）に、そして更に『陸奥話記』、『扶桑略記』（1094 年）や大江匡房「狐媚記」（『本朝続文粹』所収）・『本朝神仙伝』に拾える。一方、「葬斂」は少し遅れて『日本往生極楽記』（985 年）に現れ、『扶桑略記』・『日本紀略』へとつながる。『扶桑略記』は「斂葬之烟中有芳氣」（第廿四）と「欲支葬斂」（第廿五）のように併用されている。鎌倉期文献での様相はどのようなのであるか。「斂葬」は『吾妻鏡』第八、『元亨釈書』巻一にみる。「葬斂」は喜海の『梅尾明恵上人伝記』巻下、『鎌倉遺文』（一五三二八号、弘安七年十月十七日）、『私聚百因縁集』（巻九一十）にみる。用例が必ずしも多くないので、両形の勢力状態は明らかではない。

動乱・乱動について、『漢語大詞典』は前者例として『三国志』を、後者例として近代用例を掲げている。「乱動」はだいぶ後発の観がある。ただ五代・宋の禅籍を閲すると、『祖堂集』に「汝等莫以世情浅意，乱動悲傷（汝ら世情の浅意を以て，乱動悲傷するなかれ）」（巻十七）や『五燈会元』（巻六）などから採取できる。『日本国語大辞典』では列島文献として『太平記』『神道集』をあげているが、さらに時代を遡らせることができる。『平治物語』（中）を始めとして、『鎌倉遺文』では「山門之動乱」（四四六三号、貞永四年四月一日）などをみる。上記辞典で「乱動」例として『乾坤弁説』（十七世紀）を挙げているのはさすがである。鎌倉期までの文献ではいまだ目睹していない。

礼拝・拝礼の両形はすでに漢代に存している。列島では「礼拝」が八世紀末の『続日本紀』にみえているから、先行形といえようか。「拝礼」となると時代が降るようで、大江親通の『七大寺巡礼私記』（1140 年）や『本朝世紀』（第廿二）『貴嶺問答』（鎌倉初期成る）に採摺できる。なお前二書には両形が用いられている。例えば、「仍入堂中恣拝礼」「或尋霊像所拝礼也」（『七大寺巡礼私記』）。

領掌・掌領となると、現今の日本では両形とも耳遠い語となってしまった。それだけ縁の



薄い存在であるが、これまで盛んに引用してきた日中の大辞典にあっても挙例に寂しいものがある。まず、「領掌」は大陸文献にはなさそうである。『日本国語大辞典』は藤原行成(972~1027)の『権記』例をあげているが、時代を更に遡らせることができる。すなはち、『平安遺文』に「於宮壳進既畢、為変領掌中」(三六号、太政官符案、弘仁四年七月二日)とある。「掌領」については、わずかに『漢語大詞典』で元代文献をあげるに過ぎない。近年断代語辞典(時代別辞典)が中国で刊行されているが、例えば、龍潜庵編著『宋元語言詞典』(1985年、上海辞書出版社)、劉堅・江藍生主編『宋語言詞典』(1997年、上海教育出版社)などを調べてみた。この二書には「掌領」が登載されているものの、「首領」「掌管者」の意としている。筆者は動詞的意味を帯びた例として、時代の更に遡る『唐律疏議』に「主司、謂掌領之事及里正、村正、坊正以上」(卷二十四)を採取した<sup>18)</sup>。列島文献では『鎌倉遺文』に一例をみる。「阿観門跡可令掌領之状」(八〇四号、建久六年七月九日)が、誤植でなければ貴重例といえる。

離乱・乱離について、『同素異序詞応用辞典』は「均具動詞性、含義也相同、可互換使用」している。古典語として既に漢代に両形が出そろっている。列島では「乱離」例として『日本国語大辞典』が『懷風藻』をあげている。おそらく筆者の見落としかもしれないが、他の採録例をみない。

論談・談論は、今日もっぱら「談論」のみ通行している。一方の「論談」は『大漢和辞典』『漢語大詞典』ともに登載していない。その意味で列島製漢語の疑いがある。列島文献では「談論」がすでに八世紀の『懷風藻』に、さらに藤原忠親の『山槐記』(応保元年八月廿五日条)・栄西の『興禅護国論』(卷下)にも存在が確認できる。「論談」を目睹するのは『本朝続文粹』『中右記』あたりか。「空謝礎丘先生之論談」(藤原宗忠「中御門右丞相辞内大臣表」、長承三年七月十一日、卷五)などがある。古往来と称される『東山往来』『釈氏往来』など平安末になる課本にも確認できる。「論」を上・下接した漢語群には他にも「議論・論議」「論争・争論」等があるが、ここでは触れないこととする。

以上がHH式である。反転語の大部分がこの方式によって占められている。偏正式、即ちNH式となると、その数も少なくなるようだ。これは徐朝華氏が『上古漢語詞匯史』(292頁)で指摘しているようにNH式の大部分は「名詞性語素」を中心とすることによる。つまり動詞的意味をもつ語同士の複合にあってはHH式によるという傾向があるのであろう。数少ないNH式例として「乱入」がある。文献によっては「乱」が別体の字で表されることがある。例えば「闌入」がある。『唐律疏議』の「衛禁上」をみると「入出すべき者は悉く名籍あり、応に入るべからずして入る闌入となす」とある。本来は法制用語なのかもしれないが、列島文献では必ずしも明確に区別されているわけではない。同じく「乱」に換えて「濫」が用いられることが多々ある。『鎌倉遺文』では、「乱入」「濫入」「闌入」「闕入」がみいだせる。用例数からすれば、「乱入」が他を圧倒する。いま「乱入」をもってかんがえと、漢土では『三国志』に姿をみせ、時代降って宋代の筆記『南部新書』(1056年序)にも「持兵乱入」と用例を見る。韓土文献『東文選』(卷六)にもある。ただ『漢語大詞典』では「乱入」を収載せず、「闌入」が登載されている。それはともかく、両語とも六世紀頃には出現したようだ。さて、この「乱入」の反転形として「入乱」が考えられる。これはNH式への反転となる。HH式のように反転してもHH式に変わりはない

のにたいし、NH式→HN式と、語構成の性格を変えることになる。この「入乱」は、漢土文献では偶目すること稀なようで、漢語辞典で目睹することがない。しかしながら、列島文献、とくに平安朝のそれに頻見する。古記録類では、『貞信公記』（天慶三年正月廿五日条）『小右記』（治安二年十月六日条）をはじめとして、『権記』『後二条師通記』『中右記』などに均しくみえる。ただこの「入乱」が音読、即ち字音語であったかはさだかではない。『栄華物語』（巻五）に「入り乱れ」が見られることから、和語複合動詞の漢字化によるものか、という疑いもある。『中右記』の例を挙げてみよう。

人々従者乱入荒垣中（大治四年七月十五日条）

近日京中毎夜殺人、又強盗入乱也（大治四年閏七月七日条）

この「乱入」「入乱」は音訓両用のよみが可能である。字音語としての可能性を示す例として、『平安遺文』所収の「太政官牒写」（補二二六号、年紀がないが、文中に康和〈1099～1104〉の元号がみえる。）に「ニウラン」のよみが付せられている。おそらく音訓併読されたのではなかろうか。『平安遺文』には一〇八五号（延久四年、美濃国司案）・一一〇二号（延久六年、官宣旨）をはじめとして多数みられる。ただ鎌倉時代に入ると稀用語となり、『鎌倉遺文』でも「甲乙人狩獵入乱狼藉」（二一七一〇号、嘉元元年十二月廿三日）の一例にすぎない。平安期文献では他に『本朝世紀』に「盗人入乱掠取宮御物等」（第十六）、『政事要略』に「于時件女入乱、令罵恥甲」（巻八十四）とある。前書（国史大系本）の校訂者は、別本によって「乱入」にすべきとしている。しかし如上の使用状況から一概にそうとも言えないことになる。

HN式として「闘乱」「習練」「磨練」がある。これが反転して「乱闘」「練習」「練磨」というNH式の漢語となる。

まず「闘乱」であるが、『漢語大詞典』に至って『敦煌変文』の用例を掲げることになった。列島では『続日本紀』養老五年三月条にみえる。また『類聚三代格』（巻一、天平十年廿二日）にもみいだせる。平安期の古記録、『貞信公記』『九曆』『官部王記』などに多用されている。鎌倉期に入っても状況は同じである。一方の「乱闘」は『漢書』例があるようだが、『漢語大詞典』では見出し語となっていない。列島では鎌倉期までの文献にはみえないようである。『日本国語大辞典』でもやっと明治初期文献を示すにすぎないのである。南北朝以降出現する語と言えそうである。

習練・練習が『三国志』魏志に併用されていることは既に知られている。ただ現今の日本での「習練」は「練習」の意の古語的表現（明解国語辞典第五版）となっている。「練習」の用例を搜集するのは比較的得やすい。『本朝世紀』に「被練習政始日事」（第四十六）、『本朝文粹』に「令六衛府宿衛等、練習弩射之術」（巻二、延喜十四年、三善清行）とある。古記録類なら『小右記』『玉葉』などに見る。しかし「習練」となると、必ずしも容易くはない。藤原頼長（1120～1156）の日記『台記』例、「昨日為習練釈奠晴儀」（仁平三年七月廿八日条）、或いは『扶桑略記』の「習練護摩之法」（第廿三）が管見に入った。『台記』には「練習」（久安五年十一月七日条）もみられる。鎌倉期文献、『鎌倉遺文』を始めとして、『玉葉』『吉記』『明月記』『三長記』『平戸記』、更に『吾妻鏡』でも「練習」が殆どであろう。即ち「習練」は劣位にあったと思われる。

磨練・練磨について、『漢語大詞典』で『朱子語類』例を掲げているが、『敦煌変文』（巻

五)に「修行曩劫，磨練多生」(維摩詰經講經文(四))とあることから<sup>19)</sup>，だいぶ時代を遡らせることが可能となる。管見におよんだものとして，更に遡って『法苑珠林』に「如世真金，燒打磨練」(卷十九)がある。時代降った明代に至っても，『菜根譚』に「一苦一樂相磨練」と採取できるので，「磨練」は，語としての生命が続いていることを知る。ところが，「練磨」となると，『漢語大詞典』の見出し語になく，『大漢和辞典』では登載されているものの出典が示されていない。その語の説明も「練習研磨」の略，即ち縮約による漢語とする。これはむしろ「磨練」の反転と考えたほうがよろしかろう。列島では「磨練」例をいまだ目睹し得ていない(『日本国語大辞典』に登載されていず)。「練磨」は『古事談』二に，「頼家依定頼説經練磨事」とある。列島で生まれた漢語のようである。

この他にも取り上げるべき行音漢語がある。例えば，「去留・留去」がある。韓土・列島ではひとしなみに「去留」であるが，漢土に「留去」が初唐の『王梵志詩』にみえる。列島の反転漢語に係わらないので省略する。

## 五 反転漢語と列島言語の統語的制約

反転漢語の考証をながながとしてきた。事実としてどのような状況であったかをまず知る必要があるため，主要な漢語の一つ一つに及んだわけである。このような事実から，われわれは，どのような言語的事実を汲み取ることが出来るであろうか。換言すれば，漢語受容において，列島はどのようなフィルターが働いたか，その大体が把握できそうである。すなわち，日本列島において，

- I. 漢土の HH 式漢語は容易に反転可能である。
- II. 漢土の NH 式漢語は反転化，HN 式化は少ない。
- III. 漢土の HN 式漢語は反転化し，NH 式が通行化する。

と，概約できるのではないのか。即ち，列島言語の統語的制約内で受容されるということである。ただし，これは列島漢語の趨勢傾向であって，すべてがそうなるという，強い規制・制約ではない。時代が遡れば，それに比して規制・制約は弱いことになる。他方，漢語定着が顕著になるに従って強く作用することになる。漢語意識の深化に対応するといってもよからう。先に挙例した「勤勞」「疲勞」のように，反転化していない語も存在する。

何故，反転しないのか，という理由には，種々の因由が考えられる。とくに「疲勞」について言えば，漢土にあって「勞疲」は「疲勞」ほどに通行していなかった，否むしろ，稀れな存在であったため，列島においても積極的に反転化しにくい漢語環境にあったと考えられる。他方，対照的なのは「練磨」であろう。何故，列島で「磨練」を受容しなかった積極的な理由をみだしがたいが，NH 式という列島統語的制約に叶う「練磨」が通行する。前後したが，HH 式において，どちらを前に，後にするか，の字順は，漢土と列島では異なったり，また時代によって交替する。中国では字順に声調が関与しているとする学者もいる。さらに中川正之氏は他の言語内要因を指摘されている<sup>20)</sup>。ところが，列島において一体なにが字順決定の動因なのか，言語内・外の要因を指摘できるほど単純ではない。それは，漢土からの漢語受容という，いわば消極的面(漢土の漢語状況)と漢語を積極的に列島言語に定着させようとする(列島言語の統語的制約と調整)の二側面が存することによろう。

また、Ⅱ・Ⅲの NH 式・HN 式についても、主要部と非主要部とは、どのような意味関係になっているのか、どのような関係にあるとき反転するのか、といった問題がある。由本陽子氏は、日本語の複合動詞を五類にわけている<sup>21)</sup>。いま小稿に関係するものを挙げれば、つぎの三類がある。

- ② 様態 (V<sub>1</sub> は V<sub>2</sub> が表わす行為の様態を描写する)
- ③ 手段 (V<sub>1</sub> は V<sub>2</sub> が表わす行為の手段を表わす)
- ④ 因果関係 (V<sub>1</sub> は V<sub>2</sub> が表わす結果の原因を表わす)

漢語については、小林英樹氏が『現代日本語の漢語動名詞の研究』(118 頁, 2004 年, ひつじ書房)で、〈様態・手段〉〈原因〉〈先行動作〉の意味関係を示された。同氏によれば、このなかに収まらない漢語もあり、他の意味関係が考えられるという。

上記両氏が言及したのは NH 式についてであり、HN 式においても同様な意味関係が存すると言っているわけではない。小林氏は HN 式の意味関係については、〈目的〉関係の存することを指摘するにとどまる。同じく NH 式でも、空間移動の複合動詞に限れば、松本曜氏によって、「様態+様態」「様態+経路関係/方向性」「経路位置関係+経路位置関係」「経路位置関係+直示的方向性」(田中茂範・松本曜著『空間と移動の表現』, 148 頁, 1997 年, 研究社出版)が示されている。

上記のような複合動詞の意味関係から、漢語反転の可能性を考える端緒が開けられるのではと考えるのであるが、筆者には目下その用意ができていない。とくに HN 式漢語の史的整理が十分とはいえないからである。ともかく漢語反転現象考察は、上記の三枠からさらに下位問題へと降下しなければ、根本的解決にはならない、というところで、低回してしまった。

### 結びにかえて

漢語反転現象のうち、複合動詞をとりあげた。その大枠を提示できても、下位の個別問題に及ぶには新たな用意が必要となった。さらに稿を続けねばならない。自戒(次回)のために、言語研究にも「細部への探究による具体的なイメージの獲得という手続きが不可欠のものである」<sup>22)</sup>の言葉を添て、この稿を終えたい。

### 注

- 1) 拙稿「和漢比較漢語攷」(いわき明星大学人文学部研究紀要 13 号, 2000 年), 「列島漢語の字順定着について」(茨城キリスト教大学紀要 36 号, 2002 年)。
- 2) 『実用現代漢語語法』(2001 年, 商務印書館)。
- 3) 中国語学での「補充式」とは、「意味上, 前の形態素がある動作・行為を表し, 後の形態素がその動作・行為の結果や方向を表すもの」(松岡栄志・古川裕監訳『現代中国語総説』175 頁, 2004 年, 三省堂)であって、極めて限定されている。筆者は、NH 式と対照的な存在を想定して、「結果」「方向」といった意味を考慮せずに、HN 式と呼称した。その意味では、中国語学から「逸脱」し、まさに「乱暴」と言わざるを得ない。
- 4) 小林英樹著『現代日本語の漢語動名詞の研究』(2004 年, ひつじ書房)によれば、「左側主要部タイプは、なかなか気づかれにくい。(これまでの研究で左側主要部タイプを指摘したものはない。)」由である。
- 5) 栗田直躬著『中国思想における自然と人間』293 頁, 1996 年, 岩波書店。

- 6) 喬秀岩著『義疏学衰亡史論』103頁, 2001年, 白峰社。
- 7) 注6書同。
- 8) P. J. ホッパー / E. C. トラゴット著・日野資成訳『文法化』47頁, 2003年, 九州大学出版会。
- 9) 陳力衛著『和製漢語の形成とその展開』422頁, 2001年, 汲古書院。
- 10) 関周一著『中世日朝海域史の研究』104頁, 2002年, 吉川弘文館。
- 11) 村井章介著『分裂する王権と社会』(〈日本の中世10〉, 2003年, 中央公論社)で引用された『寺門事条々聞書』に「天命を奉じて暴乱を討ち」(202頁)とある。
- 12) 安良岡康作著『正法眼蔵行持上』(2002年, 講談社学術文庫)に「朽老」の意味は, 「年老いて氣力が衰えること, 老衰, 老朽」とする。
- 13) 田中茂範・松本曜著『空間と移動の表現』(1997年, 研究社出版)などで扱われているが, 共時的研究の結果と史的研究とのそれに齟齬がある。
- 14) 拙稿「『将門記』の表現」(『軍記文学の出発 初期軍記』所収, 2000年, 汲古書院)参照。
- 15) 繁田信一著『陰陽師と貴族社会』(146頁, 2004年, 吉川弘文館)で, 「医療による治療は平安貴族によって「療治」と呼ばれていた」とするのは, 正鵠を射た記述といえる。
- 16) 胡勅命瑞著『《論衡》與東漢佛典詞語比較研究』325頁, 2002年, 巴蜀書社。
- 17) 許興植編『韓国金石文 中世上』504頁, 1984年, 亜細亜文化社。
- 18) 『塵袋』に「掌領ト云フ事ハソノ心如何」という条がある。大西晴隆・木村紀子校注『塵袋 1』(282頁, 2004年, 平凡社東洋文庫)では, 「掌領, 夫領とも, 和製漢語かと見られるが, 用例不明」としている。
- 19) 陳秀蘭著『敦煌變文詞彙研究』(80頁, 2002年, 四川民族出版社)にも登載紹介されている。
- 20) 中川正之「漢語の構成」(1997年, 大河内康憲編『日本語と中国語の対照研究論文集』所収, くろしお出版), 「鏡像語を作る2, 3の要因」(2000年, 佐治圭三教授古稀記念論文集編集委員会編『日本と中国ことばの梯』所収, くろしお出版)。
- 21) 影山太郎編『日英対照 動詞の意味と構文』274頁, 2001年, 大修館書店。
- 22) 生松敬三著『二十世紀思想渉獵』104頁, 2000年, 岩波現代文庫。

## On Reversible Compound of Characters

Tomoyuki Saruta

There are Chinese compounds in which the order of the elements may be reversed without significant change in meaning or use. I call these “reversible compounds”. This paper considers the importation and acceptance in Japan of “reversible compound”, principally compound verbs, and discerns the tendencies listed below.

1. The compounds easily reverse when the meaning of the first morpheme and second morpheme are the same.
2. There are few compounds that reverse when the first morpheme modifies or supplements the second morpheme.
3. Many compounds are reversible when the second morpheme modifies or supplements the first morpheme.